

ミツカン水の文化 交流フォーラム2005

「リスクに強い水利都市～水循環がつくる21世紀の里（都市）とは～」
2005年11月29日 開催

水害、地震、火災、温暖化～現代都市の快適さの裏には、さまざまなリスクが存在しています。都市生活における水利利用も、こうしたリスクと裏腹の関係にあります。住民はそのようなリスクに立ち向かうことができるのでしょうか？ 水利の面から安心できる都市像について討議しました。

【テーマセッション】
「これからの里（都市）居住におけるリスク回避の方向性」

菅 豊 東京大学東洋文化研究所助教授

「リスク認知と合意形成」

中谷内一也 帝塚山大学心理福祉学部教授

「夢ではない木造文化の水利都市」

大窪 健之 京都大学大学院地球環境学助教授

「都市の水循環と安全を守る水利」

沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授

【パネルディスカッション】

「安心水利で21世紀の里（都市）をつくる文化とは」

コーディネーター：鳥越 皓之 早稲田大学人間科学学術院教授



テーマセッション

菅豊氏は民俗学の立場から、「脅威・障害を経験的、伝承的に認知し、その到来を事前予測し、危険を共同体で最小化し、生活を保障し維持する」という在地リスク管理の考え方が、水防についても行なわれてきたことを紹介し、現代でも復活させる必要があると指摘した。そして、安全を資源として管理するためには、公共性がバランス良く連携したコ・マネジメントの仕組みを考えねばならないと強調し、それが新たな里をつくる契機になるかもしれないと述べた。

中谷内一也氏は、社会心理学の立場から「個人のリスク認知は話し合えば変化するというのは誤り」と、合意形成の前提に疑問を投げかける。

千歳川放水路計画白紙撤回に至る事例を紹介し、利害関係者は最初から最後まで意見を交わさず、キャストイングポートを握ったのは一般の世論だったと指摘した。そして、リスク認知に影響を与えるのは信頼であり、信頼は相手の専門性や公正性を評価した結果だけではなく、自分と相手の価値観が似ているという「価値の類似性」に影響されるという。したがって、リスクコミュニケーションでは、人々の価値に配慮することが大事となるが、その価値の折り合いをつけることはなかなかできず、結局合意形成は難しいと結論づけた。

建築学を専門とする大窪健之氏は、自ら取り組むプロジェクト「木造文化都市」の考え方と実践例を紹介した。木造建築は文化的多様性を担保する資産であり、更新しやすいが、燃えやすいというリスクがある。これを維持するには、自然水利ですぐに消火できるまちづくり（この水利を環境防災水利という）と、今の法律基準や都市の生活様式に合わせた木造建築をつくるのが求められる。環境防災水利については、京都の産率坂重要伝統的建造物保存地区で、市民が日頃から自分たちでメンテナンス・操作できる例等を紹介した。そして、身近な水のある安全な環境と木質建築・地域コミュニティを再生することが21世紀の里になるのではないかと提言した。

沖大幹氏は、2005年の台風14号により東京・神田川水系で発生した都市型洪水を紹介し、特定都市河川浸水被害対策法や雨水浸透の促進などの行政機関の取り組みを紹介し

た。その上で、都市というのは土地利用・水循環の上からも、高密度と指摘。昔ながらの水利や住まい方を学ぼうというのではなく、コンパクトシティと呼ばれるような、高層の住宅が低密度にあり、周囲には緑地や水辺を配し、洪水のときには一旦流出を溜められるような都市が求められ、人口が緩やかに減少していくのが考える好機と述べた。

ディスカッション

コーディネーターの鳥越皓之氏が、フロアからの質問も紹介しながら、議論が展開されました。

フロアからは陣内秀信氏（法政大教授）が、大窪氏に対して、木製の町家を開発するとコンパクトにして夜間人口が少なくなる可能性があるがどう考えるか等の質問が出されました。

また、同じくフロアから嘉田由紀子氏（京都精華大学教授、琵琶湖博物館研究顧問、水と文化研究会代表）から中谷内氏と沖氏に対し、「住民の意見といっても自治会の会合や家中での発言など場面によって意見が変わる。例えば『コンクリートの川が美しい』という意見も、個人の経験なのか、共同の水害経験からくるのかを分解しないと、人々の意見を反映した政策をつくれなのではないか」という指摘がなされました。

都市・水利・リスクというテーマは、いままでもなかなか手をつけられなかった領域でした。しかし、論者からかなり踏み込んだ発言が

出た。それは、鳥越氏が述べたように「住民が持っている資源をもう一度見直そう。そして、現場というのは地域社会で生きていく限り自分の思いどおりにできるわけではなく、結局みんな考えていかななくてはならない。その制限の中で私たちはどのような工夫をしていくのかが今問われている」という問題意識が共通だったからです。

フォーラムの内容については、当センターのホームページをご覧ください。



アンケートに寄せられたコメント

- ◆都市に水と緑と土を回復するべきだと思います。
- ◆「都市」というものに水の問題を埋没してしまいがちだが、新しい都市のあり方を考える上でヒントになった。
- ◆今回の内容は、現代社会のもっとも弱い点の一つではないか。
- ◆木造の都市というのは興味深かった。
- ◆われわれの身近なインフラには計画担当者が興味本位で築造したものも多いが、報告者が市民や住民の声を反映させることが不可欠であるという視点を共通して織り込んでおり安心した。
- ◆都市化は都会のみならず地方においても宅地化等が進行している。重要なテーマだ。
- ◆今までほとんど気づかなかった分野で、初めて聞いたことが多かった。
- ◆手加減のない議論がとてもよかった。
- ◆リスクとベネフィットの観点からの議論がほしかった。
- ◆水利と防災の結合は、新しい観点だと思
- ◆「人が生きる社会」というものを考えなればいけないのだと、感じさせられた。
- ◆誰にとってもリスクが明確にしてほしい。

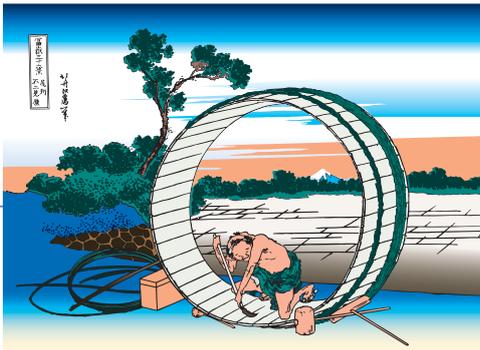
■水の文化23号予告

特集「水市場と水商売」(仮)

我々の生活経済を支えているのは農業用水、工業用水、水道といった安価な水です。

さらに、水商売というように、カネが流れる商売のイメージが、時代の世相をも映します。

水をタネにした商売の世界、歴史を見直して「水市場の文化」を探ります。



- ◆ 「おしずかに・・・」野沢の外湯で、湯上りに交わされる、「ではお先に失礼」的な、湯仲間同士の挨拶である。決して注意喚起的でなく、他への気遣いを感じさせる、自然な挨拶だ。こんな日常の中にも、代々受け継がれてきた、温泉コミュニティの一端を垣間見ることができた。(新)
- ◆ 温泉の歴史をたどり、意外と自由だった江戸の庶民の知恵や楽しみを知る。身近な共有資源を守り活用する庶民の知恵は日本人の得意技。いつまでも楽しいものにするのは、現代に課せられた宿題。温泉好きの日本人ならではの答えを探したい。(福)
- ◆ 温泉は、自身を静め・癒し・治し、周囲の人々と集い、語らい、近づく場所です。皆さん温泉では、たくさんの良い思い出をお持ちではないでしょうか。そんな温泉での私の夢は、お猿と一緒にお湯につかる事です！無理かな・・・？(武)
- ◆ 学生時代にスキーに夢中だった私。シーズンのスタート合宿は野沢のお隣、戸狩だった。以来久々に冬の野沢温泉に訪れたが、野沢菜の味は変わっていないかった。蔵王温泉にもお世話になった。玉こんにゃくの美味しかったこと。冷えたカラダを温めてくれた温泉。あの頃は癒しというよりは毎日の生活そのもの。今、癒しを第一に求めるのはトシのせいかな。(ゆ)
- ◆ TVを見ると「温泉紀行番組」花盛り。誰もが温泉には通になる。語り尽くされたと思っていた場で、温泉の文化資源管理という未踏の場所を掘ると、熱湯が湧き出てきた。地域づくりの知恵がつまっており、泉質も素晴らしい。(中)
- ◆ 「温泉に入りました」と答えたところ、「いただきます」と言いなさい」と自然の恵みをいただく大切さを説かれた。久しぶりの説教に、お年寄りが健在である野沢温泉の人的財産を思った。それに比べて、我が町の温泉の老若男女の傍若無人ぶり。改革はここからか。(智)

水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化学習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。

すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

里川研究掲示板ニュース

◆ 共同研究里川も開始後3年を迎え、9月に里川に関する本を出版する予定です。われわれが考える里川とは何か？ ご期待ください。

◆ 次回の里川対談は劇作家の平田オリザさんと、嘉田由紀子さん（京都精華大学教授、琵琶湖博物館研究顧問、水と文化研究会代表）による「川をめぐる物語はなぜ生まれるか」です。次号掲載予定。ご期待ください。

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第22号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複写

発行日 2006年（平成18年）2月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所助教授
嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会代表
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集 秋山道雄 新美敏之 今井福生 武本知之 小林夕夏
辻美代子 中庭光彦 於保実佐子 賀川一枝 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター
〒475-8585 愛知県半田市の中村町2-6
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 0569 (24) 5087 Fax. 0569 (24) 6353
ミツカン水の文化センター 東京事務局
〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F
Tel. 03 (5762) 0244 Fax. 03 (5762) 0246

お問い合わせ